因果から外れし者

天縛（あましば）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある人工島には、第四真祖と呼ばれる災厄の吸血鬼が居た。

ある旧家には、忌み子と称される青年が居た。

これは……天より与えられた呪縛を持つ者と、災厄を受け継ぎし者の物語。

目　次

プロローグ ―――――――――――――――― 1

プロローグ

ーｓｉｄｅ???ー

「ふぅ……ここが……？」

ここは本島から少し離れた、小さな島……こんな所に、”あの人”が本当に居るんでしょうか？本家の方には「あやつはこの島に居るだろう、なんせ……いや、この話は良いな」って言われましたが……あ、あそこに居るのはもしかして……。

「やっと見つけましたよ……先輩」

「……チッ……何の様だ、姫柊」

「数年ぶりに再会した後輩に、舌打ちは無いんじゃないですか、先輩」

「うるせぇな……で、何の様だよ……場所はジジイから聞いたとしても、そもそも”お前ん所”が俺に用なんてねぇだろ」

「今回は異例中の異例です、先輩。何せ伝説の中でのみ語られていた筈の”第四真祖”……その対象の観察、そして場合によっては対象の殺害が今回の任務です」

傲岸不遜を地で行く先輩も、流石に第四真祖に関しては驚いた様です……少し、驚き方に違和感を覚えますが。

「第四真祖……ね、それで俺に矛先が向いた、と？」

「はい、正確には先輩と私は真希さんにもしもがあった時の保険です、相手はあの第四真祖、念には念を入れたい、との事です」

「真希……ああ、あの姉妹の片割れか」

「はい、今回の任務では、真希さんに本家の霊具庫から、私には雪霞狼（せっかろう）が支給されています……先輩には、元々持っている物と……これを」

木箱に入った霊具を見て、先輩は笑みを浮かべました。

「へぇ……” コレ” を渡すって事は……ジジイも結構懸念してるんだな、今回の件」
「……後、でんご「どうせ、見つけたらすぐに殺せ、みたいな事言われてんだろ?”コレ” 渡すって相当だしな」……はい、その通りです」
「……心配すんな、余程の事が無い限り殺さねぇ、あのジジイの言う通りに動くつもりなんてねぇからな」

良かった、のだろうか。世界に災厄をもたらすとされる第四真祖、世界の事を考えるなら、殺してしまう方が楽なのかも知れません……でも、同時に先輩が殺しをしなくて良かった、と思ってる私が居ます。

「……ま、でも……」
「……?」

先輩は、ある方向を見ながら……、

「” アイツ” 、に泥塗る様な真似したら、叩き斬ってやるよ……なぁ、第四真祖」

いつもの笑みを浮かべて、そんな事を言います……” アイツ” 、とは誰の事なんでしょうか?

ーｓｉｄｅ真希ー
「……ここか、絃神島ってのは」

意外と本島と違いはねぇんだな、魔族特区ってのも。後から保険代わりに雪菜と冬士(とうじ)が来る見てぇだな。

「……そんな警戒する程の奴なのか?こいつが」

第四真祖は確かに危険だって言われてるが、伝説上の話だ。まぁそ

れを本当だと考えるなら妥当だが、こいつがそんな危険だとは思えねぇんだよなぁ。

「……ま、見てみれば判る事か……住所はこっちだったよな」

ーside本島のとある旧家ー

「……ふむ……真希の方は着いた頃か……まぁそれは良い、問題はあやつの方か……」

数年前に、あろう事か霊具庫から霊具を盗み、そのまま家出した〝馬鹿息子〟の顔を思い出す。

「あやつの事だ、儂の伝言なんぞ聞く耳を持たんだろうな」

だが、それで良い、そうでなくては困る。何せあやつと……この事は良いな。全く、歳を取ると昔の事ばかり思い出していかんな……ふむ、〝第四真祖〟、か……因果を外れた筈のあやつに、再び関わるとは……なんとも因果な物よ、呪われでもしたか。

「失礼致します」

「……なんだ」

「……例の第四真祖の件で、五条家の……方が面会に来ております」

「フッ、取り繕わんでも良い、あやつの事で来る五条家の人間なぞ、一人しかおるまい」

「……もうし「当主、居るんでしょ」……貴様……！誰の許可を得て入り込んで「構わんよ、止めた所で無駄だ、通せ」……御意に」

あやつの事になると、五条家の姫も動き出すか……だが、今あやつと会われるのはちと面倒だ、誤魔化させて貰おうか。

「何用だ、五条家の姫」

「……あいつが、第四真祖の件に関わるって、本当なの？」
「さてな、家出した馬鹿息子の事なんぞ、知らぬよ」
「誤魔化すな……本当の事を言え」
「本当の事を言っておるではないか、儂は知らぬよ、儂と獅子王機関が奴の件で行ったのは、家の真希と、剣巫見習いの姫柊雪菜の二名の派遣のみだ」
「……そう……”今は”、それで許してあげる」

ふむ……思いの他早く引いたな……疑念は持てど、確信には至らず、と言った所か、真面目に逃げたあやつの場所を把握出来るのなぞ、事情を知る儂やその他数名しかおらぬだろうからな、仕方あるまいて。

「だが……ふむ、五条家の姫も動き出したか……」

精々足掻いてみるが良い、馬鹿息子。